

「Ｙちゃんケア開始 2 ヶ月後の面談に同席して」

いさどんの「おやし道」を学ぶために、4 ヶ月前からケア面談に同席し始めたエリー。今回は、Ｙちゃんの 2 ヶ月面談に同席したエリーのレポートをご紹介しますと思います。

--

Ｙちゃんは 29 才、地元の病院では統合失調症（疑い）として、一時は 1 種類の向精神薬を処方されていました。Ｙちゃんは 2 ヶ月前、うつ病の父とともに木の花を訪れ、3 ヶ月をめどにケアが開始されました。来所当時のＹちゃんは、目の焦点が一点に結ばず、どこかとめどもない感じがする、幻聴に悩まされる、本当に統合失調症かと疑わせるに十分な印象の女性でした。

初回面談での主要な内容はＹちゃんの幻聴の問題でした。私は、幻聴の問題は投薬以外に解決出来る術はないだろう、また幻聴の本態はいまだ解明されておらず、そこに焦点化したアプローチがどの様に展開されていくのか、大変興味を持っておりました。

Ｙちゃんの幻聴は 2 ヶ月経った現在まで継続しており、幻聴があるにもかかわらず、彼女の思考はぐんぐん秩序だったものとなり、客観性を帯びたものとなって参りました。表情もその輪郭がくっきりとし、健康で若い女性の姿が現れて参りました。この印象の変化には大変驚きました。両の眼がカッキリと見開かれ、ボーイッシュな容姿は明治大正時代の知的女性の面影がしのばれる様です。

この 2 ヶ月面談は、Ｙちゃんの母親への思いから始まりました。Ｙちゃんが小学校 4 年の時、弟は小学校へ入学し、母親はそれを契機に勤めに出たそうです。忙しいということもあったのでしょうが、母親の生活は「だらしなく」なり、Ｙちゃんは母親を心の中で口汚くののっていたそうです。現実的には口に出したことはなく、あくまで心の中での出来事であったそうです。そういう心の中でのののしり、罵倒の言葉が続く生活の中、医療事務の仕事に従事しました。そこで上司のありあまる行為に怒りを覚えたのにもかかわらず、それを表現することは相変わらず抑制していました。

23 才のことです。その頃から人格がスプリット（split；分割）しました。従来の自分と、自分を責め、ののしる他の自分です。本来の自分には後者の声が幻聴として捉えられました。それから 6 年間、Ｙちゃんは二つの人格の間で幻聴に悩まされながら生きて参りました。人格のスプリット、そして幻聴、先にも述べた通り、世間の見立ては統合失調症（疑い）でした。

現象として診断基準に照らしてみれば、その診断は妥当なものでしょう。しかし、いさどん

は幻聴そしてスプリットした人格は、昔母親にののしり声を上げたくても上げられなかった自分が、そして、就職という大きな出来事（event）の中での極度のストレスを受け分離独立した自己が、外に表出出来ないののしり声を当たり障りのないもう一人の自己に向けたという心理メカニズムとして説明致しました。当然、治療は薬ではなく、そのメカニズムをよく理解し、感情的対立の場で自己の感情を捉え、時には表現し、時には先延ばしするコントロールの方法を学び、身につけることでした。

抑圧されたものを淡々と語る Y ちゃんの姿から、私は木の花での 24 時間生活をともにするケアの力を実感した思いでした。この様に自己の内面を語る力は、自己の中に湧き上がる思いを正直に、素直に人前で出す姿勢を最上のものとする木の花の精神性をベースにしたものです。これは月 1～2 回のカウンセリングでは決して身につけることの出来ない、人間の根幹に触れる指導の在り方です。

言葉の信憑性を推量する手立てを私たちは持っていません。精神科領域でのクライアントの訴えの正確さ、深さはそれを受ける治療者側のセンサーにかかっているとしか言いようがありません。Y ちゃん言葉の正確さ、深さ、その学問的妥当性は日々営々と営まれている農的生活、精神的生活の中で掘り当てられた岩脈の確かさによって検証されると言えるのではないかと感じております。

精神医学的素地、臨床心理学的下地のない共同体の生活の中で、ケア 2 ヶ月後に当事者の口から人格のスプリットの模様と幻聴発生メカニズムが語られたことは、それを導き出したケア担当のいさどんはじめ、木の花の人々の地道な実践力があつた故である、とファミリーの一人として思うところであります。（学問的検証は今後にゆずります。）

--

Y ちゃんにはケア 1 週間後から日記をつけてもらっていますが、いさどんと面談をした日には次のような日記を書いていました。

Y ちゃん：

いさどんと面談をした。自分になぜ幻聴が発生し、二重人格になったかを話の中で組み立てていった。ほとんど、いさどんの組み立てた物語は当たっていた。私の中の抑圧された感情が行き場をなくしてしまい、自分の中でふくれあがり、自分を罵倒する声へと変わっていったと考えられる。

その抑圧された感情は主に怒り、憎しみ、妬みというマイナス感情である。それとともに反発心もある。このマイナス感情を全て吐き出し、正直に出していこうということになった。また、自己コントロールをしていこうということになった。そのためにもう一人の自分が出

てきやすい状況をつくり、その状況で自己コントロールをするように言われた。私の癖で自分の思い通りにいかない状況を嫌がる場所があるから、そこで踏ん張ってみようと思った。

また、怠けたい心、楽をしたい心があるから、真剣に取り組もうということになった。私の傾向として傲慢な場所があるから、それを謙虚に感謝してやっていきたいと思う。

--

そして面談から数日後、Ｙちゃんはケア滞在 2 ヶ月間を次のように振り返りました。

Ｙちゃん：

この 2 ヶ月間の私の歩みは、3 歩進んで 2 歩下がるようでした。

まず、私自身の考え方の癖、傾向がかなり偏っていることを知りました。特に私が印象に残っているのは、私自身が傲慢で自意識が強いことを知ったことでした。その癖はまだ根強く残っています。ですが、傲慢だからこそ謙虚に感謝して、自意識が強いから自分をよく知ってコントロールしていくということを教えてくれました。

次に、今回のいさどんと面談で思い出したことは、私は幼い頃より孤独で寂しい毎日を送っていたということです。小学校の日記にもありましたが、あまり笑わない日々が続いていました。その頃より現実逃避し、空想にふけるようになり、仮想の世界に生きる自分自身を作り出していました。その中で、実際に体の感覚の異変、特に違和感があったり、強い怒りや憎しみの感情を抱いていたことを覚えています。その頃よりそれらの感情が悪意となり、それは時間を追うごとに大きくなっていき、そして自分では止めることができなくなっていました。

でも、木の花ファミリーの皆様は「正直、素直、信じる」ということを実践しているので、そんな中で共に暮らしていくうちに私の中の悪意がだんだん消えていきました。第一に正直であるので、素直に率直に自分の意見を言ってくれ、疑う余地がないのです。次に善意から行動しているので、すごく思いやりがあって助け合っていると思いました。最後に楽しく行動することも、私の中にはあまりなかったので新鮮でした。主に以上の 3 点が、私の中で大きく変わっていくきっかけになったと思います。

このように恵まれた環境の中で生活している事に感謝します。またいさどんを始めとした木の花ファミリーの皆様に感謝したいと思います。

--

最後に、エリーとＹちゃんのレポートを読み、いさどんは次のように語りました。

いさどん：

まず、Ｙちゃんと初めて面談をした時に、「この人は本当に統合失調症なのだろうか」と疑いを持って接していたのを記憶しています。一般的に幻覚、幻聴のような症状がある場合、統合失調症と診断されるのですが、私がこういった当事者と出会ってそこで判断する基準として、その人が機能的な欠陥を持っておられるのかどうかということがあります。仮に統合失調症として一般的に診断されたとしても、機能的欠陥でないならば、改善される可能性があると思っています。それから機能的欠陥であったとしても、何かの形でそれは改善される可能性があるかと常々思っています。ただ、それには個々の様々な事例というものがありますので、場合によっては時間がかかることもあると考えています。

Ｙちゃんの事例では、まず、機能的欠陥が彼女にあるのかどうかということを確認する必要がありますと考えました。というのは、幻聴、幻覚、彼女の場合は幻触も含めて、統合失調症と言われるもとなるものが彼女の中に定着した原因があるはずで、そういった症状が定着したプロセスがわかれば、今現在の病的な状態をつくっているもつれをほぐして改善することが出来るだろうと思っていました。ですから、当初は日々の生活の中で彼女と接しながら、彼女の状態を私の方で把握するという段階を取っていきました。面談を繰り返すとともに、彼女自身が自らを振り返っていくというトレーニングを行なっていきました。Ｙちゃんはある自分の中にあるもう一人の他者、幻聴の原因の人格を自分と分けて考えているので、自分の中でそれを同一化するという作業を進めていくように提案したのです。ある程度そのトレーニングに慣れていった段階で今回の面談に至ったということをお記憶しております。

それ以外に木の花での生活の中で彼女を安定させたものとして、「食」と「癒しの生活」というものがあげられます。また、沢山の人々とともに暮らすことによって客観的なものの観方を育てていける点も、大きな役割を果たしているのではと思います。それは客観的に他者を見るということであり、同時に自分自身の性格的特徴や問題点を客観的に捉えることが出来る環境があるということです。自分と同じような問題を持っている人たちや、健康であっても日々心の在り方を見つめる人々が常にまわりにおいて、日常の中でそういった取り組みがなされているということが大きな成果を上げていると思います。環境による気づきというものが他者から与えられるのではなく、本人の中から湧き出してくることにより、本人の自覚によって病的な状態が改善に向かっていくという効果があります。

そして、今回の面談により過去の人間関係、彼女の場合は親との関係ですが、その中で事例に出てくるような人格的形成がなされることにより本人の心の歪みが育てられ、それが統合失調症というふう診断されるような症状に現れているという結論が出せるのではないかとことです。木の花では常に当事者に対して問題事を治してあげるのではなく、サポートに徹することにより、本人が自分自身の中から気づいて自分の改善を図っていくよう促しています。私たち自身もその当事者の気づきのプロセスに出会うことにより、新たな事例

から学びをいただき、そしてその学びが次にまた訪れるであろう当事者のために生かされていくのです。そういう意味では私たちもそういった事例をいただきながら、常に学ばせていただいていることに日々感謝しているというのが私たちのケアに対する姿勢です。

総合的に、調和した心による癒しの生活があることによって成し得ることであると考えています。こういった事例を持ってここの存在価値を社会に伝えていくことはこれからの社会にとって大切なのではないかと考えております。